

## 本号のテーマ：「先生という仕事の素晴らしさ」

先日、令和5年度開校予定の臼田新小学校を建設するにあたっての会議に参加させていただきました。

臼田地区4小学校の校長先生、そして建設業者さん、市の担当者さんに教育長はじめ教育委員会の皆さんが、子どもたちがこの学校で過ごすことを想像しながら水道や棚、掲示板の位置まで意見を出し合いました。とても有意義な会議であったことはもちろんですが、私はその場がとても愛情あふれていることに感動しました。子どもたちにも親の私たちにも見えないところで、こんなにも子どもたちのことを真剣に考えてお仕事されている方がたくさんいることが有難く、感謝の思いと楽しみな思いでいっぱいでした。

この学校が、子どもたちと先生にとって、たくさんの学びと成長の場になり、楽しい思い出と共に人生の礎を築いていってほしいと願うばかりです。

私は、学校の先生という仕事はやりがいがあって楽しい仕事だと思っています。

それは、「人」を育てる仕事だからです。モノを作ったり、人に喜んでもらう仕事もたくさんありますが、一人の人間、とりわけ子どもを教育する先生は、その子どもの心身の成長と人格形成に影響を与える存在として、成果を実感した時の喜びの大きさは、どんな仕事より勝ると思います。私たち親にとっても、学校の先生は我が子に関わる大人のなかで、身内の次に大きな存在だと感じています。



子どもは自分が生んだとはいえ、別人格をもった私ではない人間です（当たり前ですが）。しかし育てるなかで、無意識に自分の思考と照らし

合わせて「こうあるべき」「こうなって当然だ」と思っていて、知らないうちにその枠に入らないところは「ダメ」とジャッジしてしまっています。

「学校には行くべき」「お友だちとは仲良くするもの」「指示することに従う子、ワガママを言わない子は良い子」など。

子どもに関わる学校の先生も同じことを感じる場面もあるのではないかと思います。親も先生も役割は違いますが「子どもを良い方向に導く」大きな目的は同じと考えます。

### ●学校の理想のイメージを描く

「生きる力」や「思考力・判断力・表現力」といった新しい学力観が綴られた新学習指導要領。やれ英語だ ICT だと指導内容は増え続け、特性を持つ子どもや不登校児童生徒、保護者の対応・・・やることも気を遣うことも増え続けています。このようなことから先

生のうつ病や精神疾患が増え、教員希望者が激減しているという見解があります。

また、子どもの状況はというと、中学生の不登校（年間30日の欠席※けがや病気除く）が100人に5人の割合でいること、ADHDや自閉症など自情障学級に通う子どもが20年余りの間に、7倍を超える勢いで増えているという統計があります。もう、今のままでの学校体制では難しい、変えていかなきゃいけない！と誰もが感じているところでしょう。

しかし、実際の現場での体制や先生の意識、授業のしかたや言葉かけがどう変わってきているのでしょうか。私たちが40年近く前に受けてきた授業（時間中、先生が説明して板書し子どもたちがノートに書き写すような授業）もいまだに見かけることがあります。宿題も一律、子どもの理解度に合わせたものではありません。「一斉授業の限界」との声を聞きますが、本当にそうでしょうか。前に述べたような、授業はこういうもの、宿題はこれをおけばいいという経験による「思いこみ」や、やったことがないことに対しての不安からくる「決めつけ」はないのでしょうか。

親の願いとしては、1人1人の子どもを主体に、1人1台パソコンで個々に合わせた学習を進め、苦手なところを補う学習より得意なところを伸ばし個々のアベレージを上げていく教育方法にシフトして行ってほしいと思っています。

ゲームのように算数の問題を取り組んでいる子もいれば、1人で本を読む子、協働で何か作り上げているグループがあったりなど、全員違うことをしながらも「学び」を進めている・・・そんななかで1人1人が認められて社会の中で役割を担う力をつけてほしいと願っています。

大切なことは「自分から取り組むこと」です。「やらされる」感があるものは勉強嫌いを生む可能性があります。主体的、創造的に学ぶことを、どう授業や学校行事に落とし込むかです。

### ●先生が主体的、創造的に仕事をする

「子どもが主体的・創造的（意欲的）に学習に活動に取り組むには」の一つとして、「先生が主体的・創造的（意欲的）に仕事に取り組むこと」だと思います。

先生だって仕事が楽しいと思わなければ意欲的にもなれません。

子育てにおいても、子どもにとってお母さんが笑顔でいることこそが一番の心の栄養です。そのために「楽しいこと」をできる範囲で見つけます。子育てママのイベントに参加

したり、ママ友とランチに行ったり。子育ての不安や家族の不満を吐き出すこともあります。良いこともあり悪いこともある、要はバランスを取っていくことが大切なのです。

コロナ感染症も落ち着いてきたところで、教員同士雑談ができるコミュニティルームや、子どもと先生が教室だけでなく校内のあらゆるところでコミュニケーションがとれる環境を作るのもいいかもしれません。親と子も先生と児童生徒も、コミュニケーションがちゃんとできていれば良好な関係が築けます。まずは「相手を知ること」が

コミュニケーション術。名前を呼んで会話できる空間作りはすぐにでもできることではないでしょうか。リラックスして話せる「憩いの場所」を校内にたくさん作ってみてもいいかもしれません。



## ●先生の多様性を認める体制づくりと学校の大切さ

先に述べたのと同様で、子どもの多様性を認める前に「先生の多様性を認める」ことが大切だと思います。

様々な育ちや経験をもつ先生に、自分が持っている「強み」をどう活かせるのか、何が子どもたちに提供できるのか？そんなことを考えるとワクワクしませんか？

そして教えるというよりも「共に成長する」という意識、子どもの良さを引き出し伸ばすチャンスを与えることが大切です。何でもできる先生である必要はありません。

学校という場所。この環境は大きいと思います。

オンライン学習やホームスクーリングなども、このコロナ禍で注目され周知や理解が進んでいることはとても良いことです。しかし、私はこの「学校」という場所は、子どもの時期にしか所属できない特別なコミュニティであり、物理的な場としても関係性にしても、とても貴重なものだと思っています。

この期間を生涯の宝物として、人生の礎に位置付けられるような素晴らしい期間にしてもらえるように、私たち教育に携わる者が、諦めないで真剣に考えないといけません。

## ●学校の先生と親の気持ち

子育ての中で私が大切にしていることは、周りの意見に合わせたり同調することなく、自分で決める（自己決定する）ことができるようになること。

自分で決めるということは、そこに責任が生じるということなので、子どもも真剣に知識や想像力を使って考えます。



私は子どもたちに習い事も進路も助言はするけれど、子ども自身が自分で決めるようにしてきました。子どもには経験も浅く、決めてもやり通すことができなかつたり失敗したりします。判断できるものが少ないときは、親自身の体験談を話したり役立つ知識や情報を子どもと一緒に集めます。更に「どっちに決めようとも、いつもあなたの味方だよ」というスタンスを崩さないで子どもの気持ちに寄り添うように心がけています。まだ子育て途中で、問題課題山積みですが、そうやって親子ともに成長しながら絆を深めてきたように思います。だから、「子育てって大変だけど楽しい！」と心から思えます。このような気持ちは、きっと先生方と同じなのではないかと思います。

「生き抜く力」というのは、今まで得た知識や情報を自らの知恵として使っていくことだと思います。そのために学校教育があり学ぶ機会を与えられているのですから、ここを良くしていけば未来は明るいこと間違いなしです。